原著論文

日本人大学生における「半知り」の相手に対する自己主張

――親しさの違いに応じたポライトネス・ストラテジーの変化――

蓼沼　力・三田村　仰

（立命館大学大学院人間科学研究科／博士課程前期課程・立命館大学総合心理学部／准教授）

日本人の対人関係の特徴の一つに，赤の他人以上に中途半端に見知った関係である「半知り」を恐れる傾向がある。文化普遍的とされるポライトネス理論では，話し手は見知らぬ相手に対しては丁寧に（冗長で，謝罪表現を使用するなど），親しい相手には親しい表現で（簡潔で，親しい言葉を使うなど），自己主張するとされる。前者はネガティブ・ポライトネス・ストラテジー，後者はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと呼ばれる。「半知り」への自己主張はこの双方のストラテジーが入り混じる状況だと考えられる。本研究では，半知りに対する自己主張の特徴を明らかにすることを目的に，大学生 61 名を対象に場面想定法によって「親しい」「半知り」「見知らぬ」それぞれの相手に対する自己主張の変化を分析した。その結果，「半知り」に対する自己主張は，「親しい」「見知らぬ」の中間程度の丁寧さ（文字数，謝罪表現の出現頻度）であることが示された。その際，謝罪表現がある場合，「半知り」に対しては，「親しい」「見知らぬ」双方で特徴的な表現（「ごめん」「すみません」）が入り混じる傾向が，予備的な分析ではあったが示された。

キーワード：半知り，自己主張，ポライトネス理論，日本文化

立命館人間科学研究，No.45，35–47，2023.

Ⅰ．序論

1．適切な自己主張における文脈依存性

人は日常的に相手に自己主張するべき場面に遭遇するが，同時に，自己主張することの困難さも経験する。自己主張に困難を感じる人々のために開発されたのがアサーション・トレーニングである。このトレーニングで教えられるアサーションとは「自他を尊重した自己主張」（平木，2009; 三田村，2021）もしくは「適切な自己主張」であるとされる（三田村，2021; 三田村・松見，2010）。アサーションに関する理論の中で，アサーションは適切（他者尊重的）であるという点において，攻撃的な自己主張とは異なるとされている（三田村，2021; 三田村・松見，2010）。

アサーションは文脈に応じてその形態（もしくはコミュニケーションの方略）を変化させる状況特異的な行動であるといえる。たとえば，Eisler et al.（1975）は「ポジティブな感情 / ネガティブな感情を実験参加者が表す（positive/negative）」「相手の人が男性 / 女性（male/female）」「相手の人をよく知っている / 知らない（familiar/unfamiliar）」という 3 つの要素からそれぞれ組み合わせが異なる合計 8 つの場面を用意し，文脈次第で，話し手が自己主張の形態を変化させることを明らかにした。

どういった自己主張の形態が適切であるかは

文化に大きく依存する。とりわけ，周囲との協調を良しとする日本文化においては，自己主張の形態は他の文化圏と比べて特に配慮を要する。三田村（2013）は，同じ日本人のなかでも，欧米的な価値観とされ，独自性を重視する志向性である「相互独立的自己観」の強い個人ほど自己主張の傾向が強く，反対に，日本文化的な傾向であり，周囲との調和を求める志向性である「相互協調的自己観」が強い個人ほど自己主張の傾向が弱いことを明らかにした。また，日本人のコミュニケーションの在り方に調和したアサーションを探る試みもなされている。安東（2005）は仮想場面に対する自由記述の回答から大学生の自己主張のスタイルを分類し，その結果から間接的な自己主張の有用性について示唆している。さらに，日本文化で特徴的と思われる自己表現として，謝罪表現の多用が挙げられる。三田村（2013）は，相互協調的自己観が強い個人ほど，自己主張場面での謝罪表現の数が増える傾向にあると明らかにしている。このような日本人の特性に合った自己主張のあり方についての研究により，日本特有の文化を尊重した日本人のための適切な自己主張方略が検討されてきたと考えられる。

2. 日本人における「半知り」と大学生の友人関係

適切な自己主張の形態が文脈に依存することを述べてきたが，「高文脈文化」（Hall, 1976）と呼ばれる日本文化においては，極めて繊細な文脈の違いが話し手の自己主張の形態を変化させると考えられる。例えば，大谷（2007）は話し手が自己主張する際，相手との親しさの程度に応じた「切替」を行っているとしている。相手との距離感の程度に応じた自己主張方略の切り替え自体は，さまざまな文化のなかで認められる普遍的な傾向である。これは後述するポライトネス理論から理解することができる。

日本においては単に「遠い - 近い」での調節ではなく，親しさが中程度の相手に対して独特な捉え方をすることが古くから指摘されている。具体的には，親しい相手と見知らぬ相手の中間的存在である「半知り（はんしり）」の相手に対して，人は恐れや不安を抱きやすいという指摘があるとされてきた（笠原，1977）。この半知りは，日本文化に特徴的とされる対人恐怖症の特徴としても挙げられることがある。対人恐怖症とは，他人と同席する場面で強い不安が生じ，他人に軽蔑されるのではないか，不快な印象を与えるのではないか，嫌がられるのではないかと思案し，対人場面をできるだけ避けようとする病態のことである（笠原，2005）。また，毛利・丹野（2001）は大学生 135 名を対象として「最も不安を感じる対人状況」についての自由記述調査を実施し，得られた 135 項目の有効回答をもとにカテゴリー分けを行った。カテゴリー分けの結果，「あまり親しくない相手」というカテゴリーが 42 項目と最も多い該当数を示した。したがって，日本人は浅い関係であるそれほど親しくない（以下，半知りとする）相手に対して不安を抱くことがあると考えられる。

大学生は学生生活の中で，様々な友人関係を持つ。岡田（1995）は，大学生は友人関係において互いに打ち解け合うような深い関わりを回避し，比較的軽い付き合いを好む傾向を明らかにしている。これは群れによる同調や気遣い，また傷つくことを恐れ表面的な楽しさを求めることによるとされている。そして，1990 年代頃から見られるこうした友人関係の傾向は，近年になっても依然として継続していることが指摘されている（岡田，2016）。以上より，日本の大学生はお互いに半知りの関係になる傾向にあるが，その相手に対して不安を抱いてしまう，という問題を抱えやすいと考えられる。

3. ポライトネス理論とは

本研究では半知りの相手に対する自己主張の特徴をポライトネス理論から検討する。ポライトネス理論とは，話し手が相手に何かを伝える際にその相手によって表現の仕方は異なるという理論である（Brown & Levinson, 1987）。ポライトネス理論は「face（フェイス）」という鍵概念を中心としている。これは社会生活を営む上で不可欠である対人コミュニケーションに関わる基本的な欲求のことであり,「positive face（ポジティブ・フェイス）」と「negative face（ネガティブ・フェイス）」に分類される。宇佐美（2002）は「ポジティブ・フェイス」を，他者に理解されたい，好かれたい，賞賛されたい，他人に近づきたいというプラス方向（外向）に関わる欲求として,「ネガティブ・フェイス」を，他者に邪魔されたくない，あるいは立ち入られたくないというマイナス方向（内向）に関わる欲求として説明している。これらのフェイスは人間が普遍的に持っているものであり，話し手がこれらを脅かさないように配慮することがポライトネスとされる。

ポライトネスは，話し手のある発話行為が聞き手にかける負荷の程度，すなわちフェイス侵害の度合いに応じて規定される。Brown & Levinson（1987）はフェイスを侵害する可能性のある行為をフェイス侵害行為（Face Threatening Act: FTA）とし，その度合いを「（話し手と聞き手の）社会的距離（the social distance）」,「（話し手と聞き手の）相対的力関係（the relative power）」,「ある特定の文化において相手にかける負荷の絶対的な程度（the absolute ranking of impositions in the particular culture）」という 3 つの要因によって総合的に規定されるとしている。フェイス侵害の度合いは具体的な値を用いて計算できる訳ではない概念的なものではある。しかしながら，宇佐美（2002）がポライトネス理論を「円滑な人間関係を確立・維持するための言語ストラテジー」と述べているように，上記のフェイス侵害の度合いをもとに話し手はどのような言語行動を行うか見積りが可能となる。実際に，Brown & Levinson（1987）はフェイスを脅かす状況において用いられるストラテジー（方略）を「①補償行為をせず，あからさまに言う（without redress action, baldly）」，ポジティブ・フェイスに配慮した「②ポジティブ・ポライトネス（positive politeness）」，ネガティブ・フェイスに配慮した「③ネガティブ・ポライトネス（negative politeness）」,「④ほのめかして言う（off record）」,「⑤ FTA を行わない（Don't do the FTA）」という 5 つに大別しており，フェイス侵害の度合いが大きくなるほど数字の大きなストラテジーが用いられやすくなると仮定している。

4. ポライトネス理論から考えられる半知りの相手に対する自己主張の特徴

文脈に応じた自己主張の形態もしくはポライトネス・ストラテジーの変化に関するこれまでの研究として，三田村・松見（2010）がある。三田村・松見（2010）は「自己主張の正当性の高さの程度」という文脈が異なった複数の自己主張場面を設定し，話し手の自己主張方略の変化を検討した。その結果，自己主張の正当性が高い文脈と比べて低い文脈において，より間接的および冗長であり謝罪を多く含む自己主張を行うこと，より丁寧な言葉で代替案を含めた自己主張を行うこと，直接表現を避ける傾向があることを明らかにした。

だが，相手との親しさという文脈の違いによる自己主張方略の変化については，いまだ実証研究がなされていない。そこで本研究では，大学生が自己主張場面において半知りの相手に対して自己主張する際の特徴を，その相手が親しい場合および見知らぬ場合と比較することで検討する。本研究では三田村・松見（2010）を参

考にし，自己主張時の文字数と謝罪表現に主に注目することとする。

ポライトネス理論では相手との距離感が遠いほど（見知らぬ相手ほど）より丁寧（冗長的・間接的で，謝罪表現を含む）に発話するとされるため，話し手は相手との関係が親しいほど少ない文字数で，かつ，謝罪表現の使用頻度のより低い自己主張を行うと考えられる。したがって，半知りの相手に対する自己主張では，親しい相手と親しくない相手の中間の文字数と謝罪数になると仮説を立てることができる。しかしながら，この場合，半知り相手に対する自己主張の特徴は十分明らかにはならない。

ポライトネス理論を発展させた宇佐美（2021）は，話し手が（適切であろうと）想定したポライトネス・ストラテジーと，聞き手が期待したそれとに齟齬が起こりうることを理論化している。具体的には，話し手が相手との関係を「親しい」と捉えてタメ語を使用し，聞き手が相手との関係をむしろ「親しくない」と捉えていた場合，聞き手は「失礼」「馴れ馴れしい」と感じてしまうという齟齬がある。反対に，話し手が相手との関係を気遣って丁寧語を使用した場合に，聞き手がかえって「慇懃無礼」「よそよそしい」などと感じる齟齬も起こりうる。その意味で，相手を気遣うことを美徳とする日本文化の対人関係においては，相手が考えるこちら側に対する距離感を正確に見積もることが求められ，半知りの相手に対しての自己主張は複雑な形態をとる可能性がある。ポライトネス理論から見た半知りの特徴は，その状況が，相手のポジティブ・フェイスを保持するためにポジティブ・ポライトネスを用いるべき状況であるのか，もしくは，相手のネガティブ・フェイスを脅かさないようにしてネガティブ・ポライトネスを用いる状況であるのかという曖昧さにある。そこで，本研究では三田村・松見（2010）では扱われていなかった謝罪表現の種類についても焦点を当てることで，半知りに対する自己主張の特徴を検討する。一般的に，日本語話者は，親しい相手に対しては「ごめん」，見知らぬ相手に対しては「ごめんなさい」というように，相手との親しさに応じて謝罪表現を使い分けている。日高（2017）は謝罪表現のうち「ごめん」はポジティブ・ポライトネスの方略であり，「ごめんなさい」はネガティブ・ポライトネスの方略であると述べている。したがって，見知らぬ相手には「ごめんなさい」が用いられ，親しい相手には「ごめん」が用いられるか，もしくは謝罪表現が使用されないと仮説を立てることができる。そして，半知りの相手に対する自己主張においては，親しい相手と親しくない相手への謝罪表現の双方が入り混じって使用されると仮説を立てることができる。

Ⅱ．目的

第1に，半知りの相手に対する自己主張は親しい相手と見知らぬ相手の中間程度の文字数および謝罪表現の出現頻度となるという仮説を検証した。第2に，自己主張で使用される謝罪表現の種類に焦点を当て，半知りとそれ以外の親しさでは，半知りにおいて，親しい相手と親しくない相手への謝罪表現が混在すると仮説を立て検証した。

Ⅲ．方法

調査参加者

立命館大学に所属する学生61名（男性29名，女性31名，その他1名）が調査参加者であった。調査参加者の年齢は19歳が2人，20歳が4人，21歳が30人，22歳が19人，23歳以上が6人であった。参加者はスノーボールサンプリングで募集した。

倫理的配慮

本調査の実施にあたり，調査の概要の説明および調査はいつでも途中で辞退できること，辞退に際して何ら不利益を被ることはないこと，得られた情報は統計的に処理され個人情報が漏れることは一切ないことを予め明記し，その上で本研究への参加に同意した者を調査参加者とした。

なお，本研究は立命館大学研究倫理委員会の承認のもとで実施した。審査番号は「2020-psy-002」であった。

予備調査

本研究では各自己主張場面において親しさの程度による比較を行う都合上，相手がどのような親しさであっても成立する場面を用意する必要があった。そこで，本調査の実施に先立ち，刺激として用いる自己主張場面の設定を目的とした予備調査を行った。参加者はゼミ生 15 名であった。

調査用紙に調査者が予め用意した自己主張を行う場面を箇条書きで記載し，その内「親しい人」「それほど親しくない人」「見知らぬ人」のいずれの相手との間であっても起こりうると参加者が思うものにチェックを入れさせた。予め用意した自己主張場面の設定は三田村・松見（2009）を参考にした。この予備調査の結果から，相手との親しさがどのような場合であっても自然にあり得ると考えられた場面を抽出し，本調査で用いることとした。

なお，予備調査の実施にあたり，調査はいつでも途中で辞退できること，調査に回答したくない場合は無理に回答する必要はないこと，辞退に際して何ら不利益を被ることはないこと，得られた情報は統計的に処理され個人情報が漏れることは一切ないことを調査用紙に予め明記し，また調査実施前にその旨を口頭で伝えた。

材料

上記の予備調査の結果，自然と起こりうると判断された，相手に自己主張する 4 つの場面を本調査で用いた。4 つの場面は以下のとおりであった。

場面①：「あなたは教室に到着し席につきました。これから授業を受けますが，筆記用具を忘れたことに気づきました。そこで近くにいた○○に貸してもらいたいと思っています。しかし○○は今携帯を触っています。あなたは何と言いますか。」

場面②：「あなたは今授業を受けているところです。その中のペアワークで○○と意見交換をしています。しかし，○○の意見はあなたの意見とは異なるものでした。あなたは何と言いますか。」

場面③：「あなたは自分の研究に向けた調査に協力してもらう人を探しています。今あなたは教室にいた○○に協力を依頼しようと思っています。あなたは何と言いますか。」

場面④：「教室の席に座っていると○○が近くへやってきました。今あなたは○○から研究のための調査に協力してもらうようお願いされています。しかし気分が乗らないので断りたいと思っています。あなたは何と言いますか。」

手続き

Google Forms を用いた Web 形式で，場面想定法による調査を行った。具体的には，調査参加者に SNS ツールを通して Google Forms の URL を提示し，調査に回答させた。

調査参加者にははじめに性別，年齢，立命館大学の学生であるかどうかを回答させた。その

後，「親しい人（例．仲が良く，相談事もできるような人）」「それほど親しくない人（例．演習や実習系の授業などで少し話したことがある程度の人）」「見知らぬ人」というそれぞれの親しさの相手に対する自己主張場面を想定させ，「あなたなら何と言うか」を文章で記述させた。調査の実施に際しては，自己主張場面における相手との親しさについてのカウンターバランスを取った。

加えて，研究参加者にはそれぞれの親しさの具体的な相手を想像させることで，現実場面とより近い自己主張がなされるようにした。その為に，想像した相手のイニシャルも回答させた。なお，ニックネームなどのイニシャルでも構わないこと，不明であればＦと記入すること，相手のイニシャルを回答したくない場合は回答しなくても構わないことを予め明記した。また，想像する相手に「同性」「同学年」という制限を設けることで，想像する相手の性質の違いによる結果の誤差を防いだ。

分析

回答に不備のあった者を除いた60名（男性29名，女性30名，その他１名）の自由記述を分析対象とした。また，自己主張をしないと回答した場合を除外したデータを分析対象とした。除外したデータは場面１の女性２名，場面２の女性１名，場面４の男性１名･女性３名であった。

統計解析にはR-3.6.3を用いた。

Ⅳ．結果

自己主張における冗長性の検討

相手が親しい場合・半知りの場合・見知らぬ場合，という文脈の違いによって話し手の自己主張が冗長で丁寧な表現になるかを検討するため，各場面の親しい・半知り・見知らぬ条件における平均文字数について１要因３水準の分散分析を行った。図１～図４は各場面における相手との親しさによる回答の平均文字数を示したものである（横軸は相手との親しさ，縦軸は回答の平均文字数，エラーバーは標準偏差，図中の値は平均文字数，括弧内は標準偏差をそれぞれ示す）。

分散分析の結果，場面①と場面②と場面③と場面④で回答における親しさごとの平均文字数に有意な差が認められた（順に F（2,173）=48.36, p <.001; F（2,176）=5.62, p <.01; F（2,179）=70.26, p <.001; F（2,167）=8.99, p <.001）。群の効果についてShaffer法による多重比較を行ったところ，場面①と場面③と場面④では見知らぬは親しい・半知りよりも，半知りは親しいよりも有意に文字数が多く，場面②では見知らぬは親しい・半知りよりも有意に文字数が多いことが明らかとなった（ps <.05）。

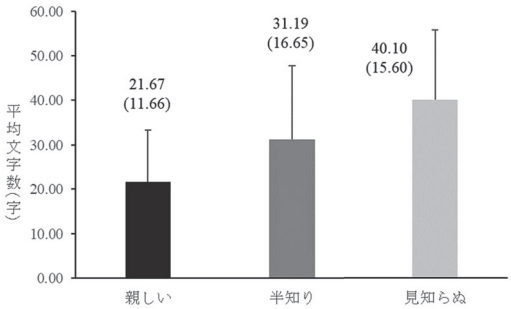

図１　親しさごとの平均文字数（場面①）

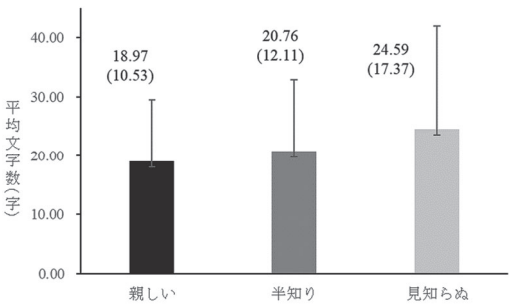

図２　親しさごとの平均文字数（場面②）

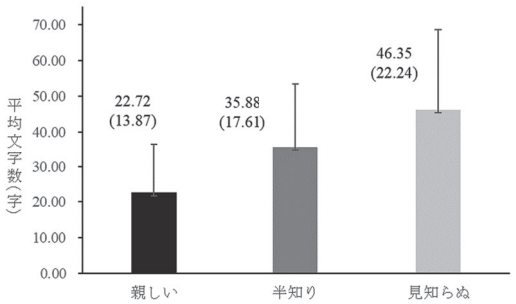

図３　親しさごとの平均文字数（場面③）

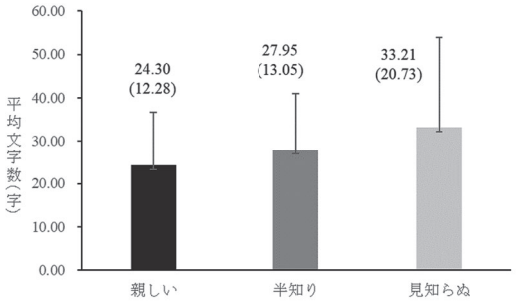

図４　親しさごとの平均文字数（場面④）

謝罪表現の有無の検討

次に，相手が親しい場合・半知りの場合・見知らぬ場合，という文脈の違いによって謝罪表現の出現頻度に違いが見られるかどうかを検討するため，文字数と同様に各場面の親しい・半知り・見知らぬ条件における謝罪表現の有無（謝罪表現有りを１点，謝罪表現無しを０点とした）について１要因３水準の分散分析を行った。なお，場面②は謝罪表現が用いられなかったため，分析対象から除外した。図５～図７は各場面における相手との親しさによる回答の謝罪表現の有無の平均値を示したものである（横軸は相手との親しさ，縦軸は謝罪表現の有無の平均値，エラーバーは標準偏差，図中の値は謝罪表現の有無の平均値，括弧内は標準偏差をそれぞれ示す）。

その結果，場面①と場面③と場面④で回答における親しさごとの謝罪表現の有無の平均値に有意な差が認められた（場面①:F（2,173）=39.51, p <.001; 場面③:F（2,179）=33.90, p <.001; 場面④:F（2,167）=9.00, p <.001）。多重比較より，場面①・場面③・場面④では半知りの相手に対する謝罪表現の回数は相手が親しい場合と比較して有意に多く（ps <.05），場面①と場面④では半知りの相手と見知らぬ相手に対する謝罪表現の回数に差が認められなかった。

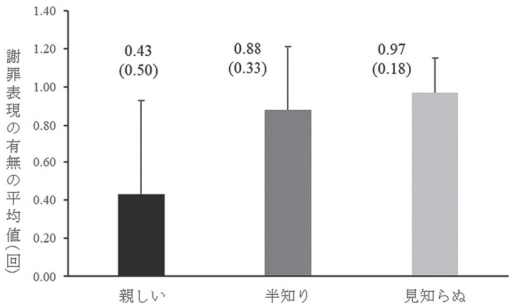

図５　親しさごとの謝罪表現の有無（場面①）

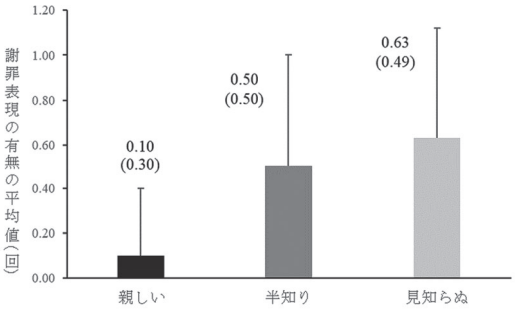

図６　親しさごとの謝罪表現の有無（場面③）

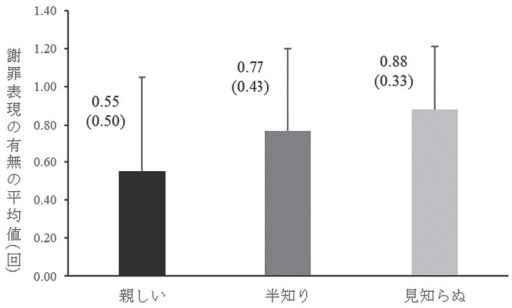

図７　親しさごとの謝罪表現の有無（場面④）

謝罪表現の種類の検討

次に，得られた発話内容の中から各場面（場面②はひとつも謝罪表現が用いられなかったた

め分析対象から除外した）における謝罪表現を抽出しカウントした（表１～表3)。なお，「すみません」は「すいません」を含んだカウント数とした。また，一つの回答に謝罪表現が複数回用いられている場合，その両方をカウントの対象とした。

表１　場面①における謝罪表現の内訳

	親しい	半知り	見知らぬ
ごめん	21	46	5
すまん	3	1	0
わるい	1	1	0
すみません	0	3	46
ごめんなさい	0	2	7
申し訳ない	0	3	3
合計	25	56	61

表２　場面③における謝罪表現の内訳

	親しい	半知り	見知らぬ
ごめん	5	22	0
わるい	1	0	0
すみません	0	4	38
ごめんなさい	0	3	0
申し訳ない	0	1	0
合計	6	30	38

表３　場面④における謝罪表現の内訳

	親しい	半知り	見知らぬ
ごめん	32	44	8
すまん	5	2	0
すみません	0	2	32
ごめんなさい	0	5	20
申し訳ない	2	2	4
合計	39	55	64

各場面において半知りの相手への自己主張に謝罪表現の混ざりがあるかどうかを検討するため，各場面におけるそれぞれの謝罪表現が全体に占める割合を相手との親しさごとに示した（図8～10）（横軸は相手との親しさ，縦軸は各謝罪表現が全体に占める割合をそれぞれ示す)。いずれの場面においても，親しい相手・半知りの相手に対して最も多く用いられていた謝罪表現は「ごめん」であった。また，見知らぬ相手に対して最も多く用いられていた謝罪表現は「すみません」であった。そして，半知りの相手に対して用いられる謝罪表現は他の親しさよりも種類が少し豊富で，親しい相手と見知らぬ相手に対して用いられる謝罪表現がどちらも用いられていた。

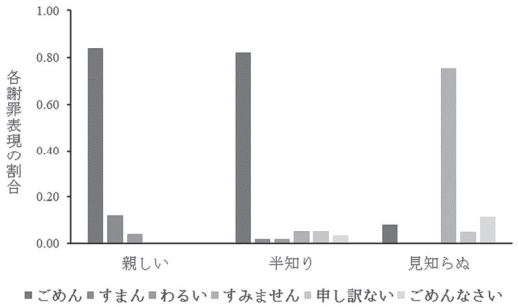

図８　親しさごとの各謝罪表現の割合（場面①）

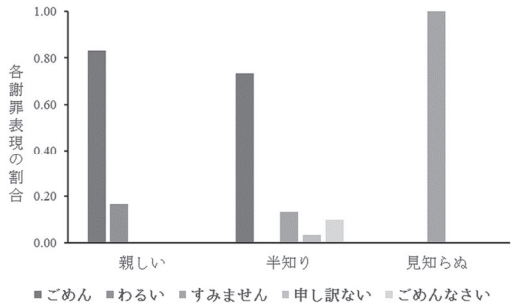

図９　親しさごとの各謝罪表現の割合（場面③）

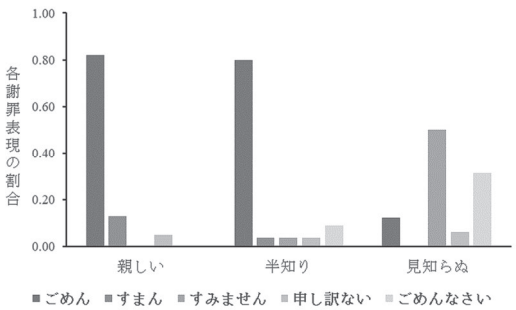

図10　親しさごとの各謝罪表現の割合（場面④）

V．考察

自己主張における冗長性の検討

自己主張場面における半知りの相手に対する回答の平均文字数は，親しい相手の場合より多く，見知らぬ相手の場合より少ないことが示され，仮説を支持する結果となった。回答の文字数は「親しい＜半知り＜見知らぬ」のように親しさが遠くなるほど多くなっており，この順で話し手は社会的立場を侵害しないようにより配慮している，すなわちネガティブ・ポライトネスをより用いるようになるということをこの結果は示唆している。

場面②では半知りの相手に対する文字数が親しい相手より多い一方で，見知らぬ相手とは差が認められなかった。相手との親しさによって文字数が変化する一つの要因は，話し手による相手への敬意や配慮を示す敬語表現の用いられ方である。場面②は場面の特性としてこの敬語表現がそもそも用いられづらい場面であったため，このような結果となった可能性がある。

謝罪表現の有無やその種類の検討

【謝罪表現の有無】

場面①・場面③・場面④における半知りの相手に対する謝罪表現の回数は相手が親しい場合と比較して有意に多いことが示され，仮説を支持する結果となった。日常的な自己主張場面において親しい相手に対してはそもそも謝罪表現をあまり用いないが，半知りの相手の場合には親しい相手のように気軽に自己主張せず，謝罪表現で一言断りを入れる可能性が示唆された。自己主張場面における謝罪表現の有無が，親しい相手と半知りの相手に対する自己主張の違いの指標の一つといえるかもしれない。

また，場面①と場面④では半知りの相手と見知らぬ相手に対する謝罪表現の出現回数に差が認められず，仮説と異なる結果となった。これはすなわち，謝罪の有無という観点から見ると，場面①と場面④のような自己主張場面では半知りの相手と見知らぬ相手に対しては同じような対応をすることを示している。謝罪表現を用いるということは，相手のネガティブ・フェイスに配慮していることを意味する。したがって，これらの結果をポライトネス理論から捉えると，半知りの相手に対する自己主張の際には親しい相手のように気軽に自己主張するのではなく，見知らぬ相手に対する自己主張の際と同じように，自己主張というFTAによって相手のネガティブ・フェイスを脅かさないためにネガティブ・ポライトネスを用いている，と説明できる。

【個々の謝罪表現】

個々の謝罪表現の分析結果より，半知りの相手に対して用いられる最も多い謝罪表現は「ごめん」であることが明らかになった。この「ごめん」について，場面①と場面③では相手が親しい場合や見知らぬ場合よりも半知りの相手に対して多く用いられることが示されたが，場面④では相手が見知らぬ場合よりも多く用いられるだけであった。場面④は「謝罪」という場面設定により，そもそも親しい相手に対しても謝罪する回数が増えたため，このような結果となった可能性がある。半知りの相手は親しい相手ではないため話し手が謝罪表現として一言断りを入れる。一方で，半知りの相手は見知らぬ相手

でもないためよそよそしい態度を取るわけにもいかない。本研究の結果から，話し手は親しい相手に対して用いられる謝罪表現を選んで，半知りの相手に自己主張しているということが明らかになった。序論でも述べたように，日高（2017）は謝罪表現のうち「ごめんなさい」がネガティブ・ポライトネスであるのに対して，「ごめん」はポジティブ・ポライトネスの方略であると述べている。本研究の結果は，半知りの相手に話し手が自己主張する際は見知らぬ相手に対する自己主張の際と同じように謝罪表現というネガティブ・ポライトネスを用いているように一見思われる。しかしながら，その謝罪表現は親しい相手に対して用いられるものであるが故に相手のポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネスとして機能している可能性がある，とポライトネス理論を用いて説明できる。ここに仮説でも示したような半知りの相手への自己主張の曖昧さが現れていると考えられる。

また，見知らぬ相手に対して最も多く用いられる謝罪表現は「すみません」であった。この「すみません」について，場面①・場面③・場面④では他の親しさの場合と比較して見知らぬ相手に対して多く用いられており，加えて場面③では親しい相手よりも半知りの相手に対して多く用いられていた。場面③のように「研究調査・研究参加の依頼をする」という日常的な場面では半知りの相手に対しても「すみません」という謝罪表現を話し手がある程度用いていることが示された。

そして，半知りの相手に対して用いられている謝罪表現については，親しい相手に対して用いられる謝罪表現と見知らぬ相手に対して用いられる謝罪表現がどちらも用いられていることが明らかになった。この結果より，自己主張場面における半知りの相手への謝罪表現は定まっていないことが示唆された。これは半知りの相手に対する表現の不確定さを示しており，仮説を支持する結果であったといえる。

今後の課題

本研究では，自己主張場面における回答について特に文字数・謝罪表現に焦点を当て，半知りの相手に対して用いられる表現の特徴を，親しい相手と見知らぬ相手に用いられる表現と比較することで検討した。その結果，半知りの相手には長すぎない文字数で謝罪表現を用いた自己主張がしばしば行われること，そしてその謝罪表現は不定であるが特に親しい相手に対する謝罪表現が多く使用されることが本研究から明らかとなった。これより，話し手は半知りの相手に対してポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスを巧みに混在させて用いている可能性が示唆された。本研究における謝罪表現の種類の分析は，統計的に検証しているものではない。この点は本研究の一つの限界である。

本研究の目的は相手との親しさに応じた話し手の自己主張の変化について検討することであったため，自己主張方略のジェンダー差については検討していない。一方で，柴橋（2001）による中高生への質問紙調査の結果からは，男子は「不満・要求の表明」を，女子は「限界・喜びの表明」を多く行うことが示されるなど，話し手のジェンダーによっても自己主張のあり方は異なると考えられる。今後は，自己主張に要した文字数やその際に用いる謝罪表現について，相手との親しさによる差異だけでなく話し手のジェンダーにおける差異にも着目した研究を行うことで，それぞれのジェンダーにおける自己主張の方略をより細かく明らかにできるだろう。

序論でも述べた通り，ある自己主張の形態が適切であるかは文化に大きく依存する。ナカミズ（1992）は日本語学習者における依頼表現に関する研究を実施している。研究の中で，日本

人留学生と日本人話者の発話内容を比較することで，日本人話者は頼みにくい状況で特に，依頼表現の後ろに「(か) なぁ」「(か) しら」という，表現を柔らかくするようなぼかし表現を用いることが比較的多かったことを示している。また，相原（2008）は日本語母語話者と中国語母語話者の依頼表現に関する対照研究を行った。その結果，日本語では中国語と比較して，どの相手においても疑問文や願望の叙述のような間接依頼文が用いられ，敬語も多く用いられることが明らかにされている。そして，ポライトネス理論の観点から考察し，日本語社会ではネガティブ・フェイスに配慮するベースがあることを示唆している。これらのように，文化的な観点も含めた比較研究を行い，自己主張の表現内容やその形態に関する特徴を明らかにすることで，日本文化における適切な自己主張方略がより明らかになると考えられる。

今回の研究手法は調査参加者にそれぞれの親しさの相手を想像させるというものであった。その過程において，それぞれの参加者が想像する相手の親しさが参加者間で異なっていた可能性がある。例えば，半知りの相手に対する謝罪表現の混ざりも，半知りの相手を想像する際に，ある参加者が親しい寄りの半知りの相手を想像する一方で，別の参加者は見知らぬ寄りの半知りの相手を想像するという違いがあったために生まれたものかもしれない。また，参加者にはそれぞれの親しさの相手だけでなく，いくつかの自己主張場面も想定させた。この際，場面を想起しづらかった可能性も考えられる。これらの問題を解決するためには，「提示した場面や人物像を調査参加者がどの程度思い浮かべることができたか」という操作チェックを調査に含めるという工夫ができると考えられる。

また，本研究は半知りの相手に対する自己主張の特徴を「話し手視点」からまとめたものであり，聞き手がそれを適切とみなすかどうかという「聞き手視点」が欠けている。ここに，半知りの相手に対しての効果的な自己主張を明らかにする上での本研究の限界があるといえる。実際に，三田村（2010）は話し手と聞き手双方の視点に注目した自己主張である機能的アサーションを提唱している。機能的アサーションとは，自己表現の結果，話し手が期待した効果を得ることを意味する課題達成と，同じく自己表現の結果，聞き手がその自己表現をより適切だと捉える語用論的配慮という 2 つの機能からなる。今後は本研究で得られた半知りの相手に対する自己主張の特徴について，聞き手視点でどのように感じるか，あるいは適切であると認識するかを具体的に検討することも求められる。加えて，本研究で扱ったポライトネス理論は「文レベル」ではなく「談話レベル」で議論される場合もある（宇佐美，2002）。文脈主義の立場に立つ考え方に則り，会話場面の分析をすることで，三田村（2010）の機能的アサーションの発展にも寄与できると考えられる。そのため，今回の研究のような自由記述による単文回答ではない，実際の会話場面における自己主張の様子も分析して研究を続ける必要がある。

本研究では，「自己主張しない」という旨の自由記述は分析対象から除外していた。ポライトネス理論において，FTA を行わないという方略はフェイス侵害の度合いが最も高い場合に取られる方略であるとされている。本研究では，半知りの相手と見知らぬ相手に対して自己主張できないという回答が存在していた。したがって，親しい相手に対して自己主張できない者はいないが，見知らぬ相手に対して自己主張できない者は存在し，同様に半知りの相手に対して自己主張できない者も存在することが本研究からは示唆された。自己主張場面において自己主張しない場合もある，という事例についても今後の検討が必要である。

文献

相原 まり子（2008）. 依頼表現の日中対照研究：相手に応じた表現選択　言語情報科学 , *6*, 1–18.

安東 有美（2005）. 大学生におけるアサーションスタイルの研究：仮想場面におけるアサーションの分類　日本パーソナリティ心理学会発表論文集 , *14*, 55–56.

Brown, P. and Levinson, S.（1987）. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

Eisler, R. M., Hersen, M., Miller, P. M., and Blanchard, E. B.（1975）. Situational determinants of assertive behaviors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *43*, 330–340.

日高 慶美（2017）. 日本語の謝罪表現「ごめんなさい」と「ごめん」について：ポライトネス理論からのアプローチ　国際広報メディア・観光学ジャーナル , *24*, 39–55.

平木 典子（2009）. 改訂版アサーション・トレーニング―さわやかな自己表現のために―　日本・精神技術研究所

Hall, E. T.（1976）. Beyond culture. New York: Doubleday.

笠原 敏彦（2005）. 対人恐怖と社会不安障害　金剛出版

笠原 嘉（1977）. 青年期　中央公論社

三田村 仰（2010）. 相互作用としての機能的アサーション　パーソナリティ研究 , *18*（3）, 220–232.

三田村 仰（2013）. アサーションと文化的自己観，対人恐怖の関連―会話完成テストと質問紙法による相関研究―　心理臨床科学 , *3*（1）, 3–11.

三田村 仰（2021）. アサーションの多元的世界へ（特集 アサーションをはじめよう：コミュニケーションの多元的世界へ）―（あたらしいアサーションをはじめよう）　臨床心理学 , *21*（2）, 147–156.

三田村 仰・松見 淳子（2009）. 自由記述によるアサーション抑制要因の検討―言いたいことが言えない理由としての他者配慮― 不安障害研究 , *1*（1）, 343–344.

三田村 仰・松見 淳子（2010）. アサーションと文脈依存性についての実験的検討　対人社会心理学研究 , *10*, 77–86.

毛利 伊吹・丹野 義彦（2001）. 状況別対人不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　健康心理学研究 , *14*, 23–31.

ナカミズ エレン（1992）. 日本語学習者における依頼表現：ストラテジーの使い分けを中心として　待兼山論叢 . 日本学篇 ., *26*, 49–69.

岡田 努（1995）. 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究 , *43*, 354–363.

岡田 努（2016）. 青年期の友人関係における現代性とは何か　発達心理学研究 , *27*, 346–356.

大谷 宗啓（2007）. 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替　教育心理学研究 , *55*, 480–490.

柴橋 祐子（2001）. 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　発達心理学研究 , *12*（2）, 123–134.

田中 圭・宮前 淳子（2016）. 浅い関係で用いられるスキルに関する研究　カウンセリング研究 , *49*, 139–150.

宇佐美 まゆみ（2002）. ポライトネス理論の展開　月刊言語 , *31*, 100–105.

宇佐美 まゆみ（2021）. 相手とのちょうどいい距離感を掴む：ディスコース・ポライトネス理論（DP理論）　臨床心理学 , *21*（2）, 196–202.

山本 もと子（2004）. 社会的相互行為としての謝罪表現　信州大学留学生センター紀要 , (*5*), 19–31.

（受稿日：2021. 7. 1）
（受理日：2023. 2. 24）

Original Article

Assertiveness Strategies of Japanese University Students toward *Han-shiri*: Changes in Politeness Strategies in Response to Differences in Familiarity

TADENUMA Riki and MITAMURA Takashi
（Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University /
College of comprehensive psychology, Ritsumeikan University）

One characteristic of Japanese interpersonal relationships is the tendency to fear *han-shiri*, which means "semi-acquaintance", a person who is more than a stranger but only a less-familiar friend. According to politeness theory, which is considered to be a cultural universal theory, speakers assert themselves by being polite to strangers（e.g., using verbose and apologetic expressions）and being friendly to familiar people（e.g., using concise and friendly language）. The former is called negative politeness, and the latter is positive politeness. In this study, to clarify the characteristics of self-assertion toward *han-shiri*, we analyzed the changes in self-assertion toward a familiar person, *han-shiri,* and a stranger. We hypothesized that people would use a number of letters and frequency of apologetic expressions in self-assertions to *han-shiri* that was in between how they would communicate with a familiar person and with a stranger. We also focused on the types of apologetic expressions used in self-assertion, conducting a web-based survey of 61 university students. We asked the students how they would express themselves（specifically requests and refusals）to a familiar person, *han-shiri*, and a stranger in different interpersonal situations. The results confirmed our hypothesis that the level of polite self-assertion toward *han-shiri* was in between the levels the participants would use with a familiar person and with a stranger（the number of letters, the frequency of apologetic expressions）. In addition, when there was an apology expression in the self-assertion, the characteristic expressions（e.g., *gomen* and *sumimasen* for familiar persons and strangers, respectively）tended to be mixed for *han-shiri*, but this was a preliminary analysis.

Key Words : *han-shiri*, assertiveness, politeness theory, Japanese culture
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.45, 35–47, 2023.